

## 南足柄市立足柄台中学校

研究テーマ：「一人ひとりの『学び』を育む指導の工夫」  
～個別最適な学びと協働的な学びを通じて確かな学力の定着～

### 1 実践の目的

南足柄市では、目指す子ども像として「夢と希望を持って、粘り強く自分の道を切り開く子ども」を掲げており、「確かな学力」の向上をめざした指導の工夫・改善を研究テーマとしている。確かな学力の定着のために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が必要であると考えている。

### 2 実践の内容

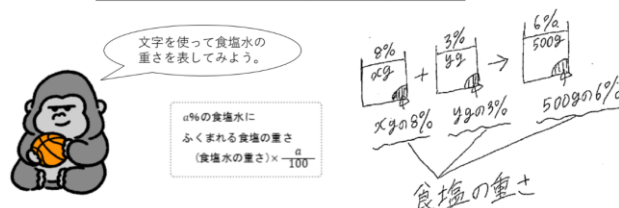
昨年度に引き続き「個別最適な学び」と「協働的な学び」の研究を進めてきた。昨年度は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が独立した学びとなってしまう、一体的な充実を図ることができなかったという課題が残った。今年度は昨年度の課題をもとに、単元計画を作成し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の成果を活かし合い、学びを深めるサイクルを形成することを目指した。

生徒一人ひとりの特性や学習進度、学習の到達度に応じた指導法などの「指導の個別化」や個々の生徒の興味・関心に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げる「学習の個性化」の2つの側面を踏まえて、生徒が学習の進め方（学習計画、学習方法、自己評価等）を自ら調整していくことができるような工夫を行い研究を行っている。

「指導の個別化」では、問題の解決方法を考えるときに、教科書や問題集、タブレット

などを使って調べたり、教師やクラスメートに質問したりするなど、学習者が自ら解決方法を決定し、自分に合ったやり方を選択できるような工夫がある。また、解決が困難になったときに、授業者が適切なタイミングでのヒントカードの提示など、授業内での観察から「指導の個別化」を図ることができた。

食塩水の濃さ	8%	3%	6%
食塩水の重さ (g)	x	y	500
食塩水にふくまれる食塩の重さ (g)			



(数学の学習でのヒントカード)

「学習の個性化」では、ソフトボールの授業において、個々の生徒がチームの状況に応じて個々に目標設定をした。全員が異なる目標に向けて自らの学びを調整しながら学習に取り組むことを通じて、生徒が自己決定する力を育むことができた。また、すべての教科において、学習の見通しをもったり、学習を振り返ったりする学習活動を計画的に設定することができた。

「個別最適な学び」を充実させるための指導の留意点として「孤立した学び」に陥らないよう、きめ細やかな指導の工夫を行い、「協働的な学び」を充実するようにした。

「協働的な学び」においては、「主体的・

対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげ、生徒一人ひとりのよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。探究する学習活動では多様な考え方をもち生徒同士が必要に応じてペアやグループで学び合うことができる機会を提供したり、生徒の考えを共有したりする場面を設定することで、他者と協働して課題を解決する力を身に付けることができた。



(協働的な学びを進める生徒の様子)

教科等の特質に応じ、地域・学校や生徒の実情を踏まえながら、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。

そのために本校では、①単元(題材)をデザインする②「個別最適な学び」と「協働的な学び」とを往還する学習活動を展開する③ICT機器を最大限に活用する。という3点に留意した。まず、単元(題材)を通して「生徒が何を身に付け、どのように学ぶのか」について明確にし、その上で、「ここは個別的に探究する必要がある」「ここでは、協働的に深めたいと生徒から声が出るの

ではないか」など、イメージをもって単元(題材)を構想した。次に、個別で学習課題に取り組んだ後、ペアやグループで意見や考えを共有し、学び合いを行い、個別で学びを深めるような学習活動を展開することができた。最後に、ICT機器の活用自体が目的にならないようにした上で、1人1台端末を日常的に活用したり、これまでの実践とICT機器とを適切に組み合わせたりして、個に応じた教材を提供したり、生徒の互いの考えを共有したりする際に、ICT機器を活用した。

### 3 実践の成果

研究を進めていく中で、生徒への学習評価アンケートの結果、「自分の考えを書いたり、話したりできる」と「課題解決に自分で考え、進んで取り組んでいる」という2つの項目で全教科高い数値となっていた。単に知識を伝達する授業ではなく、個人で考える時間を十分に取り、学び合いの機会を充実させることができた。また、「授業が分かりやすい」という項目でも高い数値となったことから、研究を通じて授業改善を図ることができたことがわかる。

### 4 今後の展開

今後の研究では、これまで以上に生徒の成長やつまずき、課題への理解を深め、よりきめ細かな指導方法を考えていきたい。また、「協働的な学び」の効果を高めるためには、学級経営を充実し、生徒が違いを認めて協力し合える学級づくりを進めることが大切である。

これからも「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両輪を要として、確かな学力の定着に努めたい。